

----- (前回からの続き) -----

アキコに言われて、タイチはウェイトレスにスイーツを頼んだ。スタイルのいいアキコだが、甘いものを食べても太らない體質らしく、パクパクと嬉しそうに口に運んでいる。タイチは甘いものがあまり得意じゃないらしく、ひとかけらを食べてはコーヒーを飲んで中和していた。

タイチ「ところでさ。さっきは条件判定とかジャンプとかを使って、プログラムしたけど、実はもっと簡単にできるんだ」

アキコ「でも、rpnでプログラムするときって、ああするしかないんじゃないの？」

タイチ「rpnって、繰り返しオプションってのを持っていて、-rの後に数字を設定するとその数字分だけ、逆ポーランド式を繰り返すようになっているんだ」

アキコ「ふーん。でも、どんなふうになるの？」

タイチ「試してみようか」

タイチはDOSプロンプトに直接、rpn式を書き始めて、ENTERを押した。

```
>rpn @s @n + #s @n 1 + #n -e @s -r 100  
4950
```

アキコ「あっ...同じ答え」

タイチ「でしょ。これだと、条件判定も必要ないでしょ。結構、便利なんだから、繰り返しオプションって」

アキコ「そうなんだ。結構、奥が深いんじゃない？ rpnって」

タイチ「ダテに15年も掛けてないかもね」

アキコ「でも、rpnって、やる気になると何処までできるの？ 殆ど機械語と同じような感じだから、プログラムは大変かもしれないけど...」

タイチ「じゃあ、実例を見せようか。rpn自体は基本的なプログラムの原則で実行できるから、これくらいはできるんだよ」

ノートパソコンの画面がアキコに見えるようにして、しばらくキータイプしていたが打ちづらいのか、アキコの隣に席をずらしてタイプし始めた。

帰国の機内以来の距離感にちょっとドキっとしたアキコだったが、目の前に展開されたrpnの魔法のようなrpnのパフォーマンスにすぐに釘付けになった。

タイチ「まずは、最大公約数の計算プログラムね...」

タイチ「次は、モンテカルロ法での 計算プログラム...」

タイチ「次は、統計の 自乗検定...」

タイチ「次は、重回帰分析で予測...」  
タイチ「次は、クラスター分析...」  
タイチ「次は、AHPによる決定...」  
タイチ「次は、ランチェスター法則...」  
タイチ「次は、...」

アキコの目の前でめまぐるしくタイチがrpn式を打っては答えを出していった。凄まじいタッチタイピングと高速に流れていく数字や記号...。たまに座標軸のグラフが現れては消えていく。

何だかわからないけど、rpnの可能性にのめり込んでいきそう。それに、傍目から見るとこの状況、二人は異様に映るかな...。アキコにふっと笑いがこみ上げてきた。この人、やっぱり自分と似てるかも。

相変わらず、子供のようにタイプしては結果を見せて、はしゃぐ仕草を続けるタイチにやっとアキコが割って入った。

アキコ「ねっ！これ、商用化しないの？」  
タイチ「価値を認める人がいそうだったら、まあ、いつかね」  
アキコ「ふーん。そうかあ...名前は変えないの？」  
タイチ「このままだとダメかなあ」  
アキコ「インパクトに掛けるしね。Windows化したら？」  
タイチ「そうだね」  
アキコ「ウェブサイトも開いたらどう？」  
タイチ「時間があればね」  
アキコ「ブログなんか、よさそうだし」  
タイチ「ああ、そうだね」  
アキコ「それに...」

最後にアキコが沈黙するまで、たわいのないおしゃべりが続いた。

アキコ「.....」  
タイチ「？」

話が途切れたせいもあるかもしれないが、アキコが黙ってコーヒーに砂糖をいれては、くるくるとスプーンで回し始めた。甘すぎじゃない？タイチがそう言おうとした瞬間、アキコが口を開いた。

アキコ「タイチくん、ところで、今日、誕生日でしょ」  
タイチ「あっ、そ、そうだね。よく覚えてたね。僕の誕生日なんて...」  
アキコ「実は...、今日...、あい...」  
タイチ「え？なに？」  
アキコ「...会いた...かった...のって...」

突然、タイチの携帯が鳴った。アキコは最悪の着信タイミングを呪った。

タイチ「あ、はい、そうですか…。はい、今すぐ伺いますので、あ、いえ、ありがとうございます。そのままの状態、はい、では…」

タイチが深くため息をついて、携帯をたたんだ。明らかに表情は曇って、目つきからトラブルの事態を整理しようとしているのがわかる。何度も似たような状況を経験しているアキコには同情するよりなかった。

タイチ「悪い。トラブってるみたい。今からすぐ客先行かなきゃ。ああ、また謝りかあ…。気が重くなるなあ。あれ、俺が作ったところじゃないのになあ」

アキコ「そう…。じゃ、早く行かなきゃ。そこって、A社でしょ。問題が大きくならないうちに対処しなきゃ。やっかいな担当者だから…」

タイチ「そうする。悪いね。じゃあ、また今度」

アキコ「…」

勘定はいいからと目配せするアキコに、急いで喫茶店を後にしたタイチがガラスの窓越しに手を振ってサンキューと言ってるのがわかる。

アキコ「はあ…」

アキコのバッグから、渡し損ねた誕生日プレゼントが見える。息を一つ吐いた後、冷えたコーヒーを一口飲んで、空の椅子に話しかけるようにポツリと呟いた。

アキコ「スタックか…。逆ポーランドのようにはうまく取り出せないね」

----- (おわり) -----